

－ 実践から学ぶ防災講習会 －

令和5年奥能登地震における 急性期から慢性期の支援活動を通して



永平寺町防災士の会 朝田和枝

発 災

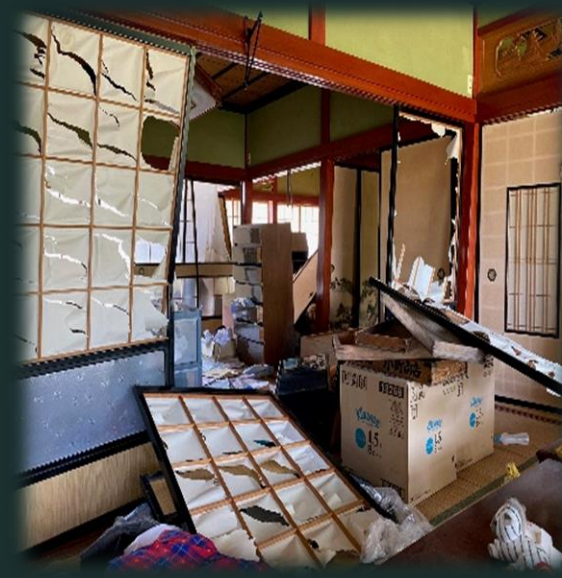
令和5年石川県奥能登地方を震源とする地震 (M6.5)

2023年5月5日14時42分

人的被害：死者1名 重症2名 軽傷45名

物的被害：全壊38棟 半壊263棟 一部破損1384棟

— 令和5年7月3日現在 —



防災・減災に関する勉強会
避難訓練・福祉避難所生活訓練
個別避難計画作成



静穏期・
準備期

発災



超急性期
(72時間)



保健医療福祉
調整本部会議



災害サイクル

急性期



見守りの必要な
要配慮者の巡回訪問

復旧・
復興期



サロン開催に
よる見守り・
継続観察の必要
な要配慮者
の巡回訪問

慢性期

亜急性期



支援活動の概要

- **超急性期～急性期**：令和5年5月6日（土）～14日（日）

保健医療福祉調整本部会議参加

正院小学校体育館避難所のレイアウト・環境整備

自宅訪問による避難所避難者への避難所生活継続意志確認

在宅避難者（独居高齢者）の安否確認

正院公民館のレイアウト・環境整備

避難場所の移動（正院小学校⇒正院公民館）

- **慢性期（発災から2か月半）**：令和5年7月19日

継続見守りが必要な在宅避難者（要配慮者）の巡回訪問

- **慢性期（発災から3か月半）**：令和5年8月19日

集会場でのサロンの開催（9月・10月予定）

在宅・応急仮設住宅で生活する要配慮者の継続見守り（巡回訪問）

急性期における支援活動から見えてきた問題①

災害急性期における 被災地の現状	災害急性期における 被災地の問題
発災後余震が続く中、応急危険度が赤と判定された自宅で被災者は日中あと片付けをしていた	<u>住民の安全確保が必要</u>
避難所にも来れずにサービスも受けていない社会的孤立状態の独居高齢者がいると思われるが安否が不明	<u>独居高齢者の安否確認が必要</u>
発災5日目の時点で、全壊9棟、半壊9棟、一部損壊452棟と示されていたが、余震状況からも数値は更に増える可能性が考えられた。	<u>在宅訪問をできるだけ迅速に行う体制づくりが必要</u>

急性期における支援活動から見えてきた問題②

災害急性期における被災地の現状	災害急性期における被災地の問題
独居高齢者や障害者宅を巡回する人員が不足	<u>巡回する人員確保が必要</u>
小学校体育館の避難所は、テント内は臭気が滞り、玄関の段差や手すりはなく、要配慮者に適した環境とは言い難い	<u>要配慮者が生活に困らず健康に留意した環境づくりが必要</u>
小学校は教育目的の施設であるため、長期的な使用となれば学業の妨げになる。	<u>長期的な視点で別の避難所の検討が必要</u>
避難所に避難している住民はいつまで避難生活が必要なのか不明	<u>避難所生活継続の意志確認が必要</u>

急性期における支援活動から見えてきた問題③

災害急性期における被災地の現状	災害急性期における被災地の問題
<p>避難所生活継続調査を実施した結果、避難所継続希望が多かった。避難所入居者も日に日に増加している。今後、修復の目途がたたない在宅高齢者が入居してくる可能性は高い。</p>	<p><u>避難者の避難場所と長期的な生活の場の検討が必要</u></p>
<p>被害にあった独居高齢者は、重い家財道具を片付けることもできずにいた。</p>	<p><u>住居の後片付けなど、人的支援の確保が必要</u></p>
<p>今後の住居について先を見通すことも困難で、罹災証明などの手続きにも戸惑っていた。</p>	<p><u>要配慮者の個々の状況に応じた支援が必要</u></p>

急性期における支援活動から見えてきた問題④

避難所生活継続の意思確認のための自宅訪問事例より

- 1) 後期高齢者夫婦と娘：夜間のみ避難所生活。娘は仕事に出かけて不在。高齢者夫婦が**赤紙**が張られた自宅の中で後片付けをしていた。天井や壁が剥がれ落ちる中、修繕の目途が立たないと言いながら、2人で家財道具を自宅の庭に運んでいた。（娘が罹災証明書提出済）
- 2) 独居（男性）：**赤紙**の貼られた自宅の後片付け「自宅の写真を撮ってもらっていい。その写真を役所に提出しておいてもらえないか。どうやって写真撮ったらいいかわからない」（罹災証明書未提出）

気がかりな独居高齢者の安否確認のための訪問事例より

- 3) 独居・後期高齢者（女性）：「高齢なので避難所まで行けない。壁が崩れていても生活できるからこのままでいい」と話し、壊れた自宅で生活していた。⇒地域支援者（保健師）に報告。
- 4) 独居・後期高齢者（女性）：自宅前にある小屋の外でうつむき加減で長時間座り込んでいた。訪問時話しかけると「自宅が物凄くて入れない、誰かが物を取りに来た」など、辻褄の合わない言動が見られた。⇒地域支援者（保健師）に報告。

急性期における支援活動の実際

1. 避難所内のレイアウト作成、換気、トイレ掃除、手すりの設置、段差調整等、避難所環境を整えた
2. 避難所アセスメントシートを作成し、避難所環境を継続して整えた
3. 早期から在宅避難している独居高齢者宅を訪問し、現状調査と健康管理に努めた
4. 毎日、保健医療福祉対策本部の会議に参加し、地元保健師や他機関の支援団体と情報共有し、協力しながら課題解決に向けた支援活動を行った
5. 小学校から公民館へと避難所を移動し、新しい生活環境へのスムーズな適応調整を行った
6. 倒壊の危険性のある住家に住んでいる方々や車中泊の方々などリスクの高い方々を洗い出し地域の方に繋いだ

支援活動の概要

● 超急性期～急性期：令和5年5月6日（土）～14日（日）

保健医療福祉調整本部会議参加

正院小学校体育館避難所のレイアウト・環境整備

自宅訪問による避難所避難者への避難所生活継続意志確認

在宅避難者（独居高齢者）の安否確認

正院公民館のレイアウト・環境整備

避難場所の移動（正院小学校⇒正院公民館）

● 慢性期（発災から2か月半）：令和5年7月19日

継続見守りが必要な在宅避難者（要配慮者）の巡回訪問

● 慢性期（発災から3か月半）：令和5年8月19日

集会場でのサロンの開催（9月・10月予定）

在宅・応急仮設住宅で生活する要配慮者の継続見守り（巡回訪問）

慢性期における支援活動から見えてきた問題

見守りが必要な独居高齢者の訪問事例より

- 1) 独居・後期高齢者（男性）：高度の難聴あり、近隣住民との繋がりもあまりない様子。顔色不良、鼻水、咳き込みあり。「血压計を買わないといけない」と言い、自身も身体面の不安がある様子。他県に息子や孫がいる（年1回程度面会）。⇒健康管理等見守り必要
- 2) 独居・後期高齢者（女性）：朝の血压の薬を飲み忘れる。（時々近隣の娘の支援あり）⇒慢性疾患増悪予防のため、内服管理が必要。
- 3) 独居・後期高齢者（女性）：地震後不安が強い。夜間パジャマを着て眠れず。枕元に靴や貴重品、内服薬等は置いて眠る。顔色白くやや不良。熟睡はできていない様子（近隣の息子の支援あり）⇒定期的な訪問で精神的なフォロー必要。

慢性期における支援活動の実際

- 地元の保健師の方に要フォローが必要な方を提示して頂き、数名で担当者を振り分け巡回訪問した。
- 継続見守りが必要な方々の自宅を訪問し、被災状況を確認しながら話を聴く中で、身体的な問題や精神的な問題を抱えながら生活していることがわかった。
- 被災者からの困りごと、問題点を抽出し、今後継続支援が必要かどうかを評価し、地元保健師に繋いだ。
- 自身が訪問した被災者の中でも継続支援、見守りが必要とされている方がいたため、中長期的な支援が必要と思われた。

支援活動の実際（ウラ事情…）

(^_^;) 巡回訪問の際、地元の地図や車のナビを頼りに、在宅避難者を訪問するが、なかなか自宅にたどり着けないという困難な場面に幾度も遭遇。

【所感】

- 出会った地元住民から情報収集し、被災者宅へたどり着けた。永平寺町内でも作成されている地域の防災マップがあると外部支援者も容易に巡回訪問できる。
- 個別避難計画が作成されていると、迅速に訪問でき情報収集が図れる。

まとめ

1. 災害急性期、すぐには被害の全容は容易にわからない。地域には避難所に避難できず支援を必要とするよう要配慮者がいることを念頭に被害状況や在宅避難者の安否確認及びニーズ把握が重要。
2. 要配慮者のいのちを守るために被災地の内部リソース（保健師の通常業務）を継続させることが重要。Keyとなる地元保健師を他の外部支援者と連携しながらサポートしていく必要がある。
3. 災害は被災者に長期にわたり影響を及ぼす。支援者は、長期的な視点を持ち、被災者に寄り添う継続支援が必要。
4. 奥能登地震における支援経験からも、現在永平寺町で実施している個別避難計画作成は重要で、今後も継続して推進していく必要がある。